

「ゆとり教育」がもたらした影響とこれから  
～ゆとり教育は必要なのだろうか～

明治大学経営学部公共経営学科  
4年20組22番  
学籍番号1730071594  
指導教員 小関 隆志  
菅澤 聡

## ～目次～

序章 教育の変化を見て

第1章 「ゆとり教育」とは・・・

第1節 ゆとり教育の誕生

第2節 ゆとり教育の具体例

①学習内容3割削減

②週5日制

③総合的学習

④新しい学力観

第2章 「ゆとり教育」がもたらしたもの

第1節 学習について

第2節 生きる力について

第3章 現代の「ゆとり教育」

第1節 週5日制の未完成

第2節 学習指導要領の改訂と移行措置による教科授業時間増加

第3節 2009年問題

第4章 現場の声を聞いて

終章

第1節 仮説の検証

第2節 学力とは・・・

第3節 筆者の考える教育改革

第4節 筆者の感じた事

## 序章 教育の変化を見て

筆者が住んでいる千葉県では、2011年から高校入試が変わる。今年は「特色化選抜」という実技や面接などをメインにした個性重視の入試の制度がなくなり、前期後期の2回の学力重視の5教科試験に変わった。教員が1年間の指導カリキュラムを考える際のガイドラインとなる文部科学省作成の指導要領も、一度減ったものがまた増えてきている。学校という教育現場を取り巻く環境は、時代や社会的背景とともに変化しているし、もちろん筆者が在籍していた頃の学校と現代の学校を比べてみても変わっている部分がある。社会的背景とは、パソコンの普及や流行などの子どもを取り巻く生活環境の変化、少子化問題、学校の統廃合、モンスターペアレントなどの親側の問題など様々な要因が存在している。だが、筆者が考える最も目立った変化は「ゆとり教育」といわれる教育制度の変化である。

本論文では、たくさんある要因の中でも、このゆとり教育にスポットを当てて、ゆとり教育が現代にもたらしたものに着目し、これからゆとり教育と呼ばれる日本の教育はどのようなようになってゆくのかを論じていきたい。

そこで筆者は1つの仮説を立てた。「ゆとり教育は、完成された教育改革ではないのではないだろうか」。本論文で、ゆとり教育がもたらした影響を見つけ、これからの教育がどのように変化していくのか考えていく事を本論文の課題とする。

研究方法は主に文献。ゆとり教育について論じている論文から、ゆとり教育が著者たちにどのようにとらえられているのかを見て、本論文に反映させる。また、1月2日に千葉県の公立中学校の教員の方にインタビューを行い、その現場の声を本論文に反映させる。

研究対象は主に小学校と中学校の義務教育期間における学校や子ども達を中心として本論文を作成する。

本論文の構成は、第1章で本論文のテーマである「ゆとり教育」とは何かを論じ、本論文上での「ゆとり教育」を明らかにする。またその中でゆとり教育の中での「学力」とは何か定義づけを行う。第2章では教育現場の現状や「ゆとり教育」の前後で変化した事を主に学力の視点からデータや論文から見つけ、それを分析して、どういったことが読み取れるのかを述べる。第3章で、第2章の内容を踏まえ、現代の「ゆとり教育」はどういった意見があるのかを述べる。そして、第4章でインタビュー内容を述べる。そして終章でまとめを行い、筆者の視点から「ゆとり教育」について論じ、本論文を終了とする。

## 第1章 「ゆとり教育」とは・・・

この章では、本論文の入り口として、「ゆとり教育」とは実際どういう教育改革なのか、いつ誕生し、実際どういう改革が行われたのかを述べていく。その中で「ゆとり教育」を推進する文部科学省の意見を述べる。

### 第1節 ゆとり教育の誕生

まずはゆとり教育誕生の流れから述べていく事にする。

「ゆとり」という言葉が日本の教育分野に初めて登場したのは、1977年の学習指導要領内に「ゆとりと充実」というスローガンが掲載された時とされている<sup>1</sup>。1960年、1970年に出された指導要領による「教育課程の現代化」とその前の改訂にある理数科重視があいまった事、また「新幹線授業」と言われる詰め込み教育の実施により、小学生3割、中学生5割、高校生7割の授業のわからない子ども達、「七五三」を作り出し、落ちこぼれが増加する事態を招いた<sup>2</sup>。また上位層の子ども達による受験戦争を活発化させた。この状況への批判により、文部科学省はそれを改善するべく「ゆとり」を作る事に目をむけ、このスローガンを誕生させた。そして、このスローガンを受けてそれを実施したのが、1980年の学習指導要領である。文部科学省は現代化の波から脱するため、新しい学習指導要領を施行した。その内容は、指導内容の削減と科目勉強を行わない「ゆとりの時間」の導入である。ここが「ゆとり教育」の始まりといえる。

しかし、1980年代半ば以降、いじめや不登校、学級崩壊や高校中退、暴力事件など若者による犯罪が増えた。また「エリート」といわれる高級官僚や金融機関のトップの不祥事などにより、学校の教育、国民への教育に問題があるという見方が広まって行く<sup>3</sup>。それは地域社会にとどまらず、経済界からも批判が出始める。具体的には、「独創的な人材が育たない」、「学校は成績で生徒を差別している」、「登校拒否、不登校が増加している」、「いじめが深刻化している」などで、要するに「個」を大事にしていけないとの批判が強くなってきていた。この頃から世の中が「個」を鍛える路線から「個」を守る、大切にす路線へと徐々に移り始める。これは豊かになった社会的背景がもたらしているし、時代の変化

---

<sup>1</sup> 「学習指導要領について」 <http://www.liberalarts.cc/gakusyusidouyouryou.html>

<sup>2</sup> 荻谷剛彦『教育改革の幻想』 筑摩書房 2002年 49ページ

<sup>3</sup> 荻谷剛彦『教育改革の幻想』 筑摩書房 2002年 12ページ～13ページ

を横目に見つつ、その当時の学校教育の制度は合わないものになっていったという<sup>4</sup>。

それを受けて、1989年、1998・99年に二度の学習指導要領の改正を行った。その内容は1977年の「ゆとりある充実した学校生活」を実現させるため、また21世紀の社会に対応できる心豊かな人間を育成すること、「ゆとりの中で生きる力の育成」を目指した<sup>5</sup>。

そして2002年、また新たな学習指導要領を作り、学習内容の3割削減と週5日制というゆとり教育の集大成といわれる大きな改革を行った。そして点数では測れない生きる力を重視した「新しい学力観」に基づいて2002年のゆとり教育が実施された。この2002年がゆとり教育の決定版といえる。

## 第2節 ゆとり教育の具体例

この節では、学習指導要領にのっとった「ゆとり教育」と言われる具体的な内容について、それぞれ説明を付け加えながら、述べていき、実際にどう変わったのか、どういった制度を盛り込んだのかを見ていく。今回はゆとり教育の集大成である学習内容3割削減、週5日制、総合的学習の3つを紹介する。また、ゆとり教育における新しい学力観とは何かを述べる。

### ①学習内容3割削減

学習内容3割削減とは、文字通り学校教育で教える内容が3割減るという事である。

実際は1980年から少しずつ学習内容は削減されていた。だが、政府は2002年に3割削減という大幅な削減を行ったのである。具体的に述べると、図表1-1は2002年に小学校の算数からなくなったもの、また中学校数学へ移るものの一覧である。

---

<sup>4</sup> 諏訪哲二『プロ教師の見た教育改革』 筑摩書房 2003年 30ページ

<sup>5</sup> yahoo!百科事典

<http://100.yahoo.co.jp/detail/%E5%AD%A6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%A6%81%E9%A0%98/>

図表 1 - 1 2002 年小学校算数からなくなる単元・中学校へ移行する単元

2002年 小学算数からなくなる単元			中学校へうつるもの	
単元名	旧学年			
1 「もののかたち」の平面図形	1年	1 文字を使った式		5年
2 広さくらべ・かさくらべ	1年	2 図形の合同		5年
3 不等号の式	2年	3 比例・反比例の式		6年
4 4桁の整数同士の加減法	3年	4 図形の対称		6年
5 3桁×2桁、3桁×3桁の整数の乗法	3・4年	5 縮図と拡大図		6年
6 3桁の整数で割る除法	4年	6 角錐と円錐		6年
7 四角形の相互の関係	4年	7 柱体・錐体の体積・表面積・展開図		6年
8 ものの位置の表し方	4年	8 場合の数		6年
9 仮分数・帯分数を含む分数の加法・減法	4・5年			
10 台形と多角形の面積	5年			
11 容積	5年			
12 正多角形	5年			
13 帯分数を含む分数の乗法・除法	6年			
14 小数点第二位以下のある小数の加減乗除	4・5年			
15 能率的な測定	6年			
16 メートル法の仕組み	6年			
17 度数分布	6年			
18 比の値	6年			

(出所 永山彦三郎『現場から見た教育改革』筑摩書房 2002年)

2002年の新学習要領になる際に世間で最も話題になった所は、円周率が3になる事であった。他にも台形の面積の公式、帯分数の計算など以前は必ず覚えさせられたもの、慣れ親しんだものがなくなっている。上記の表が載っている文献の著者は「なかなかうまいなという感じを持っている。小学生がいつもひっかかるようなところがうまく削除されたなという感じである<sup>6)</sup>」と述べているように、確かに筆者が塾で教えている上でも、子ども達がつまずくような内容のものが削除されている。だが、1980年から始まった学習内容の削減が、結果として子どもたちの学力を下げることになったと言う人もいる。

文部科学省はこの3削減について教育改革Q&Aの中でこう答えている。

「共通に学ぶ知識の量は従来と比べて減りますが、自分で学ぼうとする意欲や学び方をしっかり身に付けさせることにより、そのような心配はないようにしています。<sup>7)</sup>」

## ②週5日制

週5日制とは従来日曜だけ休みだった学校を土曜日も休みにして、週5日学校を開くというものである。これもゆとり教育の目玉のひとつである。実はこの週5日制は、世界で

<sup>6)</sup> 永山彦三郎『現場から見た教育改革』筑摩書房 2002年 18ページ～20ページ

<sup>7)</sup> 教育改革Q&A [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/kaikaku/main4\\_a1.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/kaikaku/main4_a1.htm)

はすでに行われている取り組みで、イギリスなどで取り入れられている。1992年から1か月に1回、1995年から1か月に2回土曜日を休みにするようになり、そして2002年の新学習指導要領で、どの土曜日も完全休みとする週5日制を取る事を決定した。

文部科学省はこの週5日制の狙いを、「学校、家庭、地域社会の役割を明確にし、それぞれが協力して豊かな社会体験や自然体験などの様々な活動の機会を子どもたちに提供し、自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの「生きる力」をはぐくむこと」としている。

### ③総合的な学習の時間

3つ目は「総合的な学習の時間」である。文部科学省によると、総合的な学習の時間とは、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする時間」の事である<sup>8</sup>。具体的な学習活動として、①自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など、体験的な学習や問題解決的な学習。②課題に対して興味・関心別にグループを編成したり、異年齢の子どもたちが一緒に活動をしたり、個人研究を行ったりするなど多様な形での学習。③保護者をはじめ地域の専門家や留学生など学校の先生以外の人たちの協力を得たり、地域の図書館や博物館、企業や工場、川や山などの施設や自然を積極的に生かした学習。などなどその形態は多様になっている。さまざまな体験を通じて各教科勉強では身につかない「生きる力」を養おうというものである<sup>9</sup>。

では、実際の現場ではこの総合的な学習の時間はこういったことが行われているのか。総合的な学習の時間は、小学生で各学年105～110時間、中学生では70～130時間の授業時間を設定されている。その中で実際に行われているものは、金子真理子氏の2002年度の学校調査によると、小・中学校ともに総合的な学習の時間を「テーマ学習」に使っている学校が8割を超えている。加えて、小学校では、「コンピュータを使った学習」84.0%、「英語学習や英会話」58.8%も多い。また、半数近い小学校教師が「教科の学習内容をより深める学習」にも取り組んでいる。学級担任制の小学校の場合、「総合的な学習の

<sup>8</sup> 文部科学省 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sougou.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sougou.htm)

<sup>9</sup> 教育改革Q&A [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/kaikaku/pdf/p98.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/kaikaku/pdf/p98.pdf)

時間」は、学級内の様々な教科学習とも関連づけられて活用される傾向がある。一方、中学校では、「コンピュータを使った学習」「将来の進路や職業などの指導」「学校行事やその事前事後の学習指導」がそれぞれ7割と多く、「教科の学習内容をより深める学習」は2割強であり、小学校と中学校でそれぞれ使い道が違う事がわかる<sup>10</sup>。

#### ④新しい学力観

「新しい学力観」とは、前述したような詰め込み式の学習を改善するべく打ち出された考え方である。「新しい学力観」とは、新指導要領の狙いである「自ら学ぶ意欲」を実現するために作られた価値観であり、「児童中心にし、児童一人一人の良さを生かし、豊かな自己実現の資質や能力を育成するという新しい教育の趣旨、新しい学力観に立つ教育」を実現するために考えられた。従来の価値観であった「基礎的・基本的な内容」の重視ではなく、「個」の学習への志向性を大切にしている学力観である<sup>11</sup>。基礎基本の内容を重視した学力観が、詰め込み式の学習を引き起こしたとして、学力観からの改革を行ったのである。

「新しい学力観」というが、ここでいう学力とは何か。ゆとり教育上の学力とは、「目に見えない学力＝生きる力」といわれる。従来の学力観にある「点数化される目に見える学力」ではなく、「生きる力」とされている目に見えない学力が、ゆとり教育の中では重視される傾向にある。文部科学省によると、生きる力の具体例として「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」、「たくましく生きるための健康や体力」などが挙げられている<sup>12</sup>。

## 第2章 「ゆとり教育」がもたらしたもの

第1章で述べたのが筆者の本論文で述べるゆとり教育の概要である。では、このゆとり教育が実際に始まってから、影響したものにはどのようなものがあつたのだろうか？まず図表2-1を見てほしい。このグラフは、2002年にさいたま市在住の小学生とその保

---

<sup>10</sup> 第3回学習指導要領基本調査

<http://www.crn.or.jp/LIBRARY/SHIDOU/PDF/S1310059.pdf#search='総合的学習の時間'>

<sup>11</sup> 諏訪哲二 『プロ教師の見た教育改革』筑摩書房 2003年

<sup>12</sup> 文部科学省 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm)

護者を対象に、衆議院議員武正公一氏のインターン生が行ったアンケート調査結果である。

このアンケートは、「完全週休5日制の下、各学校が「ゆとり」のなかで「特色ある教育」を展開し子供たちに学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容を確実に身につけさせることはもとより、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」をはぐくむこと」とあるこのねらいは、実際に小学校の現場で活きているのだろうかそのような疑問から行われた調査である。

見ての通り、1980年から始まったゆとり教育は、ゆとりをうんでいない、または変わらないと思っている人が約9割も占めている。世論は変わっていると感じていない。

だがしかし、教育改革が行われて、制度も変わっている中で何も変わっていない、そんなはずはない。著者が様々な文献や資料を調べていく中で、主に学力の面で変わってきたもの、影響が出ているものを見つけ、実際のグラフや、論文を紹介しながら考えを述べていく事にする。

#### 図表2-1 学生・保護者の日常感覚

「文部科学省が示したゆとり教育で子ども達にゆとりはできましたか？」

(出所：ゆとり教育アンケート <http://www.takemasa.org/intern/yutori/yutori.htm>)

## 第1節 学習について

初めに学習面から見ていこう。

まず、はっきり分かるものとして、学校で行われている学習時間は明らかに変化してい

る。1970年代と今とでは、中学3年間で学習時間595時間も違う<sup>13</sup>。そしてその延長である高校生、大学生の勉強時間も同様に減ってきていると書かれている<sup>14</sup>。もちろんこの結果の原因すべてがゆとり教育ではないであろうが、学習内容の3割削減、週5日制など「勉強する時間」を減らしてきた影響がないとは言えないだろう。

また、学習時間を国際比較してみても明らかに学習時間が減っている。中学2年生の学習時間を国際比較すると、宿題する時間において日本平均は1時間、国際平均は1.7時間、一方テレビを見る時間は日本平均が2.7時間、国際平均は1.9時間である。学習内容の削減や休みを増やしたことによるのか、教育標準の高い国でありながら、いつの間にか勉強時間が減り、国際平均を下回るほど勉強しなくなっている。またしていたとしても、学習塾での時間で、自分で自宅学習している時間はほとんどないという現状がある<sup>15</sup>。

次に学力について。ゆとり教育で学力低下が騒がれているが、本当に学力は下がったのか。『学力を育てる』の著者志水宏吉氏が行った学力調査の結果をしてみる。この調査は1980年からゆとり教育が始めてから9年後の1989年と、21年後の2001年に大阪の小中学校それぞれ十数校を選び、国語と算数・数学の基礎問題を同じテストで行い、比較して、目で見える学力を見た調査である。結果は図表2-2を見てほしい。御覧の通り、この対象年の差、12年間の間に学力は確実に低下していたということがわかる。

図表2-2 平均点の比較

平均点の比較 (点)			
	1989年	2001年	変化
小学国語	78.9	70.9	-8
小学算数	80.6	68.3	-12.3
中学国語	71.4	67	-4.4
中学数学	69.6	63.9	-5.7

(出所：志水宏吉『学力を育てる』 岩波書店 2005年)

またゆとり教育により、子ども達の自由な時間が増えたことにより、子ども達の学習に対する姿勢に影響を与えたとも述べている。図表2-3を見てほしい。前述した調査の中で、子ども達の生活時間の使い方と、家で勉強するかを聞いた調査結果である。ゆとり教

<sup>13</sup> AllAbout <http://allabout.co.jp/gm/gc/66184/3/>

<sup>14</sup> 市川伸一『学力低下論争』 筑摩書房 2002年 56ページ～60ページ

<sup>15</sup> AllAbout <http://allabout.co.jp/gm/gc/66184/3/>

育の実施により、週6日制だった1989年の子ども達と週5日制を導入し始めて10年たった2001年の子ども達が、それぞれ学校にいる時間の減った子どもたちが何をしていたか。全体的に勉強や読書といった学習に関係している生活の割合が減り、テレビやゲームの割合が増えている。特に中学生は顕著に表れている。また図表2-4では、家庭学習をしない子が増えている結果となっている。著者はこの結果をみて、「家庭学習離れが点数を下げている。これはゆとりによって、子ども達の生活に対する「しぼり」をゆるめ、学習に取り組む姿勢を結果として弛緩させたという状況をこれらの数値から読み取ることにはむずかしくない」という結果になっている<sup>16</sup>。

図表2-3 生活時間の変化

生活時間の変化			(分)			
	小89	小01	変化	中89	中01	変化
家で勉強する	53.6	40.7	-12.9	43.7	29.1	-14.6
テレビをみる	140.6	136.2	-4.4	126.2	158.7	32.5
TVゲームをする	34.5	56.9	22.4	23.8	51.9	28.1
読書をする	29.4	25.2	-4.2	29.9	26.4	-3.5

(出所：志水宏吉『学力を育てる』 岩波書店 2005年)

図表2-4 家でどのように勉強するか(しない子の割合)

家でどのように勉強するか(しない子の割合)			%			
	小89	小01	変化	中89	中01	変化
学校の宿題	1.5	2.1	0.6	11.4	33	21.6
学校の勉強の復習	43.3	46.7	3.4	43.6	60.2	16.6
学校の勉強の予習	59.2	60.8	1.6	63.4	74.1	10.7
塾の予習復習	71.2	67.6	-3.6	48.5	59.6	11.1

(出所：志水宏吉『学力を育てる』 岩波書店 2005年)

## 第2節 生きる力について

では、数字では測れない「新しい学力観」である「生きる力」は伸びているのだろうか。ここでは総合的学習の時間について検証しながら、教員や子ども達にどのように影響しているのかを見ていきたい。

<sup>16</sup>志水宏吉『学力を育てる』 岩波書店 2005年 54ページ～60ページ

まず実際に子供達の前に立っている教員達はどのように感じているのか見ていく。

図表 2-5、2-6 の金子氏の 2002 年度からの調査によれば、各小中・学校を小・中学校教師とともに、「一般教員が創意工夫して授業プランを組み立てる機会が増えた」が小学校が 93%、中学校が 84%、また「教師間の情報交換や連携が強化された」と考えている教員が小学校は 82%、中学校では 78% などのメリットを感じていることがうかがえる。

一方、「教師の負担が増えた」「学習テーマの設定に悩むようになった」「教師によって負担の差が大きくなった」「具体的に何をどのように実施したらよいのか悩んでいる」といった回答は、小・中学校教師ともに多く、実践を深めるうえでの負担感や悩みが現れている。特に中学校教師にその傾向がはっきり見られ、さらに「基礎学力の定着の時間が削られた」という意識も 7 割近くに達する。また評価の仕方も悩みの種になるようである。

次に、子どもの変容についての手ごたえはどうだろうかという質問に関しては、「児童・生徒の学習意欲が高まった」という手ごたえは、小学校教師の 7 割強が感じているが、中学校教師は 4 割強にとどまっている。また、「児童・生徒は学ぶ力や学び方を身につけた」についても、小学校教師は 7 割弱が感じているが、中学校教師は 5 割にとどまる。<sup>17</sup>

上記の結果から見ると、教師のアンケート上では、「総合的な学習の時間」導入の教育政策上のねらいである児童・生徒の主体的な学習意欲を高め、「学ぶ力」や「学び方」を身につけさせることは、小学校では効果があるが、より教科勉強を重視される中学校では半分も効果を感じていない。また今後、「総合的な学習の時間」導入のメリットを生かし、当初の政策的意図を果たすためには、教員に対する条件の整備や支援が必要である事がわかる。

次に子ども達の感じている変化はどのようなものだろうか。

まず、子ども達にとって生きる力を育てるために作られた総合的な学習の時間は必要なのだろうか。「総合的な学習の時間が好きだ」「総合的な学習の時間の学習は大切だ」という質問を小学生中学生に行った結果、小学生は 7 割以上、中学生でも 6 割以上を示している<sup>18</sup>。これは総合的学習を通して、子ども達がなんらかのプラスな影響を受けている結果であると見ることができる。

---

<sup>17</sup> 第 3 回学習指導要領基本調査

<http://www.crn.or.jp/LIBRARY/SHIDOU/PDF/S1310059.pdf#search='総合的な学習の時間'>

<sup>18</sup> 総合的な学習の時間

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/ongakutou/04000400020007003.pdf>

またこの生きる力を育てるために実施された総合的学習について三重大学や名古屋女子大学の共同研究の結果がある<sup>19</sup>。10校の研究協力校の子ども達1200人に調査を行い、数字では見えない学力に対して、子どもたちにアンケートを行って意識調査を行った結果である。まず小学生、中学生の子たちが総合的学習を行った後で、達成度の高い項目が図表2-7である。

どちらにも「新しいことがわかった」、「友達と協力して調べることができた」という項目を達成したと思える子ども達が多くいる。これは、総合的学習の狙いに含まれているものではないが、生きる力、人間としての豊かさを獲得している、感じている証拠だと考えていいだろう。また「学習成果を発表できた」「質問や感想を表現できた」と感じている子どもも多く、これはコミュニケーション能力、相手に伝える力を育むうえで必要な経験を積んでいる。この三重大学の行ったアンケートから考えると、総合的学習の時間から生きる力を育むことは可能であり、子どもたちは教科学習だけでは積めない経験を積んでいることが見て取れる。 教員側と生徒側からの視点で「生きる力」についてみてきたが、結果は「総合的学習の時間は、子ども達にも教員にもプラスに働いている所が多いように思える。特に子ども達は、机の上だけでは学べないものを、総合的学習の時間から学んでいる」ことがわかったが、教員側に出ている負担面など改善する点があることも同時にわかった。

図表2-5 小学校教員の総合的学習に対する評価

(出所：第3回学習指導要領基本調査

<http://www.crn.or.jp/LIBRARY/SHIDOU/PDF/S1310059.pdf>)

<sup>19</sup> 「総合的な学習の時間」の成果と課題についての検証と分析

<http://cerp.edu.mie-u.ac.jp/shimomura/paper/%E6%A6%82%E8%A6%81%E5%AE%8C%E6%88%90%E7%89%88.pdf>

図表 2 - 6 中学校教員の総合的学習に対する評価

(出所：出所：第3回学習指導要領基本調査

<http://www.crn.or.jp/LIBRARY/SHIDOU/PDF/S1310059.pdf>)

図表 2 - 7 総合的な学習の時間を通して達成度が高い項目

達成度が高い上位3項目			
	1位	2位	3位
小学生	郊外に出かけたり、本やパソコンを調べることができたか	友達と協力して学習できたか	新しいことがわかったか
中学生	友達と協力して学習できたか	新しいことがわかったか	調べたことをまとめることができたか

(出所：「総合的な学習の時間」の成果と課題についての検証と分析

<http://cerp.edu.mie-u.ac.jp/shimomura/paper/%E6%A6%82%E8%A6%81%E5%AE%8C%E6%88%90%E7%89%88.pdf>)

### 第3章 現代の「ゆとり教育」

この章では、前述した影響を及ぼした結果、ゆとり教育が現在はどういった方向に進んでいるのか、教育現場の現状と、実際に行われた改革を述べる。

#### 第1節 週5日制の未完成

新学習指導要領「ゆとり教育」の目玉でもあった週5日制が現状として完成されていない。そして、その事実を自治体は認めているという。朝日新聞の調べでは、土曜授業を公認している自治体が20府県に及ぶそうだ。その理由は「週6日制を続けている私立の学校に対抗するため。補習が必要なため」とされている<sup>20</sup>。

学習指導要領の影響をあまり受けず、週6日制を今でも行っている私学を希望する保護者も増え、中学受験をする子どもが増えてきた<sup>21</sup>。1日5時間授業を行うとして、週5日と週6日で5時間差、1か月で20～25時間差、1年で240時間～300時間もの差を生む。それだけ勉強に向かう時間の差があれば、差が出てくるのは当然であるし、土曜を返上し、補習を行う理由もうなずけるだろう。

#### 第2節 学習指導要領の改訂と移行措置による教科授業時間増加

様々な批判を受け、2011年度に小学生、2012年度に中学生が、また再度改訂された「脱ゆとり」の学習指導要領で授業が始まる。その内容によると小学生は

①278時間の授業時間増加

②生徒の考えをまとめて発表をしたり、人の意見をしっかり聞く言語活動重視

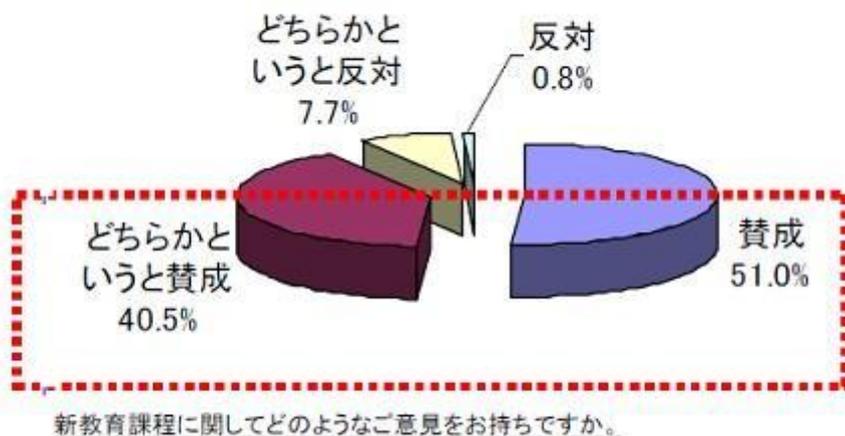
の2点だそうだ。注目すべきは①の方である。年間で35～70時間、6年間で278時間の増加を行う事を発表した。小学校だけでなく、中学校でも、105時間の授業時間増加を行うし、教科書の量の増加も行う<sup>22</sup>。そしてその分、総合的学習の時間が削減される結果となっている。2010年に“脱ゆとり教育”を掲げたとされている来年完全施行される新教育課程に関する意識調査を、メディアインタラクティブが全国の小学校低学年の子どもを持つ男女600名を対象に実施した結果が図表3-1である。賛成が約9割を示している事実が見て取れ、この改革は保護者からも受け入れられている。

<sup>20</sup> asahi.com <http://www.asahi.com/edu/news/OSK200501110060.html>

<sup>21</sup> Allabout <http://allabout.co.jp/gm/gc/8/>

<sup>22</sup> ガジェット通信 <http://getnews.jp/archives/75064>

図表 3-1 新教育課程に関する意見



(出所：ガジェット通信 <http://getnews.jp/archives/75064>)

### 第3節 2009年問題

第2節の授業時間の増加に伴って、2009年問題が起こった。その2009年問題とは、2011年の新学習指導要領の完全実施に向けて起こる弊害を懸念して作られた言葉である。2011年度、2012年度の完全実施に向けての移行措置といわれる内容増加が、2009年度から行われている。その内容の一部は図表3-2、図表3-3のようになっている。

図表 3-2 小学校4年生の移行措置

2009年度に小学4年生に追加された項目			
・四則計算の結果の見積もり			
・小数の積・商			
・そろばん			
・面積の単位			
・平面図形(直線、平行四辺形、ひし形、台形)			
・空間図形(立方体・直方体、平面の平行・垂直、見取り図、展開図)			

(出所：AllAbout <http://allabout.co.jp/gm/gc/66226/>)

図表 3 - 3 中学校の移行措置

数学	新しい学習内容
中1	・図形の移動(98年)
	・投影図(98年)
	・球の表面積と体積(98年)
中2	なし
中3	・有理数、無理数(98年)
	・二次方程式の解の公式(98年)
	・相似な図形の面積比と体積比(98年)
	・円周角の定理の逆(98年)
	・標本調査(98年)
( )内は削減された年	

(出所 : AllAbout <http://allabout.co.jp/gm/gc/66226/2/> )

各教科の授業時間を増やして、逆に選択科目を廃止し、総合的学習の時間を削っている。これによって今まで発展だった内容を基礎として学ばなければならなくなってくる。これらの内容を学ぶ事は、今までの内容にやっとの思いでついてきた子どもたちにとっては、ついていく事がとても困難になる可能性が高い。また教師にとっても指導方法の変更を余儀なくされるという。これを2009年問題と呼んでいる<sup>23</sup>。だが、2011年度からの新学習指導要領への完全移行を行うためにはやむを得ない判断であり、遅かれ早かれ改革するためには必要だという。

文部科学省では、この2011年度の新学習指導要領についてQ&Aの中でいくつかの質問に答えている<sup>24</sup>。

Q1 「生きる力」を育むという現行指導要領の理念はかわるのか？

「生きる力」をはぐくむという基本理念は、新しい学習指導要領においても変わりません。今回の改訂では、この「生きる力」の理念の実現のために、これまでの学校現場等での課題を踏まえ、指導面などでの具体的な手立てを確立することを目指します。」

Q2 ゆとり教育から詰め込み教育にまた逆戻りするのか？

「詰め込み教育」への転換ではありません。授業時数の増加は必要ですが、指導内容を増やすことを主な目的とするものではありません。また、子どもたちが学習にじっくりと取り組める時間を確保するという考え方は今回の改訂でも重要です。「ゆとり」か「詰め込み」

<sup>23</sup> AllAbout <http://allabout.co.jp/gm/gc/66226/>

<sup>24</sup> 文部科学省 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/qa/kihon.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/kihon.htm)

かということではなく、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着とこれらを活用する力の育成をいわば車の両輪として伸ばしていくことが必要です。」

## 第4章 現場の声を聞いて

私の知人である、実際に千葉県内の中学校で教員をしている方に話をうかがうことができた。中でも私が注目したのは、下記の3つの質問の回答である。

まず、「ゆとり教育は必要だったか」という問に対して、「必要だった」と彼女は言う。その理由は「学力を高めるためには詰め込む教育よりも、ゆとりの中で子ども達にたくさん経験させながら成長を促していくような環境のほうが、長い目で見て学習指導要領にある生きる力が身についていくと思う」からだそうだ。

次に「ゆとり教育の子ども達を見ていて、自分が子どもだった時と変わったと思うところがあるか?」。答えは「特別支援教育の制度ができたのが1番違う。発達障害に対する知識が広まったために、今までは怠けていると思われた子ども達にしっかり将来的な教育ができるようになった。また、習い事をする子どもたちが増え、子どもがいそがしいように感じた。」

最後に「年間の教える分量が増えたが、適切だと思うか?」。「適切ではない。常に時間に追われながら授業をしている。個別の支援まで手が回らない現状がある。本当に生きる力をつけさせるのであれば、もっと時間的な余裕が必要である。」

1人の教員の意見であるから、他にも考え方がある。だが、この方の意見を用いるのであれば、「ゆとり教育は必要だが、実際子どもたちに時間的なゆとりは生まれていないように思える、現代の新指導要領の変化はいいとは言えない」という結果になる。

ゆとり教育は必要だった。もともとの狙いは現場の教師から見ても間違いではなく、世間の批判とは対照的に、長期的に見て生きる力をはぐくむ事、特別支援教育の制度などが生まれたりと、個人を尊重する姿勢は現場からは賛成の声が上がっていたようだ。だが、結局時間的なゆとりが取れていない現状があることもわかった。子どもは塾や習い事の時間を取られて忙しくしているし、教員は新学習指導要領の増加に追われているために、個人を尊重しようとするが、子どもは忙しくてゆとりを感じていないし、教員は指導に負われ、手が回らないという現場からの貴重な意見を得ることができた。それと同時に現場でゆとり教育の考え方が100%実施されてはいない事がわかった。前述した保護者は授業時間の増加を歓迎しているのとは裏腹に、現場の教員にとっては大変な事のようなのである。

教員にとってはなおさら個人の支援に時間がさけなくなってしまう。個を尊重する、個を育てる所にまで手が回らなくなるように思える。

## 終章

ここでは、これまでゆとり教育について論じてきてのまとめを行う。まずは仮説の検証を行い、そのあともう一度「学力」とは何かを考える。そして私の考える教育改革の一部を述べ、最後に論文を作っていく中で筆者が感じたことを述べて、本論文を終了する。

### 第1節 仮説の検証

筆者が本論文上でたてた仮説は「ゆとり教育は、完成された教育改革ではないのではないだろうか」である。それが本当かどうか検証する。1980年から始まり2002年に集大成を見せ、今また変わろうとしているゆとり教育は本当に完成されていたのか。私がこの論文で導いた結論はNO。つまり私の調べた限りでは仮説は正しかったと言える。

詰め込み式の改善から始まったゆとり教育は、あまり国民に歓迎された教育改革を行ってきたとは言えない。一概に改革のせいとは言えないが、学力の低下や、学習意識や生活に少なからず影響を及ぼしているだろうし、来年からの教育内容の増加や、総合的な学習時間の削減などの改革、本論文で述べてきたさまざまなデータが物語っている通り、いまだ完成されていない改革のように思える。また2011年度からの改革以降も、授業内容や、授業時間、制度についても変わっていく部分が出てきてくる可能性がある大いにあり得る。しかし、その変化が前に進む変化であれば大に行なうべきである。

### 第2節 学力とは・・・

もう一度あらためて「学力」というものはなんなのか考えてみよう。教育改革はその時代時代の学力観に流されてきた事もわかった。従来 of 学力観に代表される、点数や結果として出てくる「見える学力」は、世界に対抗するエリート、人材を作るためにも学力アップが欠かせないとして、詰め込み式の点数重視の学力観が生まれた。またゆとり教育の中に盛り込まれた生きる力である「見えない学力」は、子ども達の起こす事件、学校の教育現場の混乱を鎮め、子ども達に生きる力をつけてもらうためにできた学力観。そして、学力論争といわれるものは、この前者のエリート主義と後者の脱エリート主義の戦いである

ともいえる<sup>25</sup>。学校の教育も、この2つの学力観の中で、2つの主義の中で大きく揺れてきた。

筆者は、どちらも学力であるとする。点数に見える学力も、見えない力を学ぶ学力もどちらも学力。どちらも教育をするうえで、生きていく上で必要なものである。ただ世論が教育に求める学力は時代背景に影響されるものである。例えばいじめが増えれば、生きる力の学力、つまり新しい学力観に重きが置かれ、学力低下が騒がれれば従来の基礎基本重視型の学力観が求められる。つまり学力のニーズによって、その時代の「学力」というものが定義されるように感じた。学力という観点だけならば、基礎基本の学力も、生きる力も学力であると筆者は考える。

しかし、ここで1つ気づくことがあった。塾という筆者の職場の視点で考えると、求められる学力は前者の基礎基本の学力であり、受験などの制度を見る限り、点数重視の学力が求められる。そう考えると、受験という各学校のゴールは基礎基本重視の従来型の学力観、実際の学校生活は生きる力重視の新しい学力観という矛盾が生まれていることに気付くであろう。この矛盾によって生まれたギャップが、ゆとり教育がうまくいかなかった理由の一つなのではないだろうかと考えられる。ゴールと過程が違うような考え方であれば、教師の指導方針にも大きく影響がでるし、迷いも生じる。また生きる力の指導は、受験に対してはあまり効果が生まれないのではないかという思いも出てくるのではないだろうか。またゴールが点数なのであれば、学習時間の長い私立の学校や、勉強を教えて点数を上げてくれる塾に需要が出てくる理由もうなずける。

### 第3節 筆者の考える教育改革

学力観がそうであるように、教育も変化するものだし、筆者は生き物であると、実際に塾で働いていて感じる。学力に関する議論や理論で何とかなるわけでもなく、実際にその場で働く者たちがより強く、より繊細に現状を理解しているし、子ども達もずっと同じわけではない。そして、全国一律にまったく同じ教育をする事は困難なのである。それは序章で述べたように、子ども達を取り巻く環境は学校だけではないからである。だが、日本という国である以上、一定のルールは必要になるし、ガイドラインがある事によってある程度同じものが提供できる。それが学習指導要領であるのだろう。とするならば、筆者はこの学習指導要領を作成する際、学者や研究家の視点だけでなく、教育者の考え方をうま

---

<sup>25</sup> ベネッセ教育情報サイト <http://benesse.jp/blog/20071122/p9.html>

く混ぜ合わせた指導要領を作成できるような教育改革を実践するべきではないだろうかと考えた。それこそ1教員の意見ですら、非常に貴重な意見になりえるのではないだろうか。学者や研究者は、知識はあるが、経験の面では教育者に劣る。その逆で教育者は経験はあっても、学者や研究者のような知識はない。この両方をうまくミックスした改革を行う方向を見いだせないだろうか。

私は文部科学省の教育改革担当の人間は一度実際に教師として、教壇に立つべきではないだろうか。もしくは現場教員を教育改革担当にできるような制度を作るのはどうだろうか。筆者は、教育は生き物であると考え。実際にその生き物である教育や学校、子ども達や先生、保護者などの教育に関係のある要素すべてに自ら触れ、自らの肌で感じ、外からはわからない中の部分を覗くことによって、より現場の目線、子どもや先生の目線に立った教育改革が可能になるのではないだろうか。

そしてもう1つは学者と研究者、教育者を半々に混ぜたチームを組んで教育改革を行うべきである。知識と経験をうまくミックスした教育改革を行うべきである。しかもお互いを批判し合うのではなく、お互いの意見を混ぜ、よりよいものを作る意識の高いチームである必要がある。

というように実際の制度を動かすのではなく、制度を作る根本を一度改革してみたらどうだろうか考える。

## 第4節 筆者の感じた事

筆者がここまでゆとり教育というものを調べていて、最も感じるのは、現実と理想のギャップ。それがとても大きく存在していて、現実と大きな溝を生んでしまったために、とても大きな批判を生んだように思えた。それは制度と現場の溝であったり、文部科学省や指導要領を作った人達と現場教員の溝であったり、子ども達との溝であったりとあらゆる所にあったように感じた。

2002年のゆとり教育について『プロ教師の見た教育改革』の筆者である諏訪啓二氏は本書中でこう述べている。

「現場の感覚で言わせてもらえば、理想と現実はかなり違う。教育改革混迷の要因は、文部省のトータルな改革論および改革プランが、かえって旧来型の学校での教育のあり方をドラスティックに否定しているところにある。現場の教師たちが自分たちの指導機関で

ある文科省によって否定されて、みんな途惑っている。」<sup>26</sup>としている。

また『現場から見た教育改革』の著者の永山彦三郎氏は「この教育改革の理念が、今の学校・教育システムには高級すぎる。問題なのは学校を中心とする日本の教育システムが、個の理念を具現化するほど成熟していない。もし教育改革が、現場の混乱を招いていたり、見るべき成果をあげていないとすれば、学校・教育システムの大きな枠組みを壊さないまま、小さな内容改革を積み上げよう、というそのアプローチに問題がある。」<sup>27</sup>と述べている。

だが、一方で永山氏は同書中で教育改革の良い点として、以下の事を挙げている<sup>28</sup>。

- ①理念自体は間違っていない
  - ②「ゆとり」の教育も現場としては歓迎。なぜなら偏差値 50 以下の子ども達には有効だから
  - ③子ども達は「わかった」を希求している。そのためにわかるという行為はとても大切で、自己肯定感のアップに貢献する
  - ④総合学習は不透明な社会を生きていく子にとって、とても大切な部分をたぶん育てる
  - ⑤見える学力では光の当たらない、子どもの違った側面、潜在能力を引き出せる。
- としている。

2002年の文献には、ゆとり教育を否定的にみているものも多く、学力低下をゆとり教育のせいにしてしているような論文もある。実際影響がないわけではないだろうが、見えない学力は排除し、今までの詰め込み式学習のほうがよいといった形に、ゆとりはいらないから勉強させようという意見は少し行きすぎのように思える。良い面があつて、悪い面がある。その両方の良い所をとり、よりよい教育を目指す考えには至らないのだろうか、「ゆとり教育」をテーマで論文を調べ、作成していく中で思う場面が多々あった。確かに良い結果をうんでいない面もあるが、実際現場に立っている教師から良い点として挙げられているいくつかのポイントも出ている。つまり、ゆとり教育の恩恵を受けている者たちも存在しているという事実も存在している。そこに目を向け、いい所は残し、悪い所は改善するべきである。それが国レベルの内容であるならば、なおさら慎重にかつ確実に行わなければならないと感じた。

---

<sup>26</sup> 諏訪啓二『プロ教師が見た教育改革』筑摩書房 2002年 12ページ～13ページ

<sup>27</sup> 永山彦三郎『現場から見た教育改革』筑摩書房 2002年 171ページ～172ページ

<sup>28</sup> 永山彦三郎『現場から見た教育改革』筑摩書房 2002年 170ページ～171ページ

また教育改革の影響の大きさを改めて痛感した。教育制度の改革した事によって、子どもへの影響はとても大きい。学校の制度を変える事は、子どもの生活までも変化させる可能性がある。それは第2章での生活時間などを見てもらえれば読み取れる。また子どもだけでなく、現場の教師に与える影響も大きい。今回のインタビュー、また教師に対するアンケート結果からもうかがえる。2011年・2012年の改革がどのように影響するのかは始まってみないとわからないが、大きく変化を生むのは間違いないだろう。また子ども手当などの学校に関係する以外でも、改革が今年も行われて、教育業界が大きく動く年と言われている。将来の日本を担う子ども達のためにも、我々大人ができる事をするべきであるし、教育改革に携わるならばその事を一番に考えて政策を打ち出さなければならない。

人間としての「ゆとり」を求めたゆとり教育は、ゆとりを生み出したのかどうか。その答えは、はっきりとうみだせたとはいえない結果になったように見える。だが、教育は時代とともに変化し、時代に合わせて進化していくべきだと考えている。そのためにはその時代その時代をしっかりと見つめ、その時代の子ども達を見つめ、本当に意味のある教育改革を行う必要がある。教育改革が及ぼす影響はとても大きい。前述したように子ども達の学力、生活、環境はもちろんだが、それにかかわる教師や保護者にも影響が出る。つまり、教育に直接携わっていなかったとしても、子どもや仕事を通じてほぼ全国民へ影響するのが教育改革である。だからこそ、本当に意味のある改革をするべきだし、安易な改革はすべきではない。それこそ混乱を招きかねないであろう。教育の主体となる子ども達は将来を担う人材である事は間違いない。その将来を担う子ども達に対して、将来の社会を明るいものとするような教育改革がなされることを心から祈っている。

最後にこの調査にご協力いただいた先生に感謝の言葉を述べて、本論文を終わりにする。

[参考文献]

- ・岩木秀夫 2004年 『ゆとり教育から個性浪費社会へ』 筑摩書房
- ・刈谷剛彦 2002年 『教育改革の幻想』 筑摩書房
- ・永山彦三郎 2002年 『現場から見た教育改革』 筑摩書房
- ・諏訪哲二 2003年 『プロ教師の見た教育改革』 筑摩書房
- ・藤田英典 2005年 『義務教育を問いなおす』 筑摩書房
- ・市川伸一 2002年 『学力低下論争』 筑摩書房
- ・志水宏吉 2005年 『学力を育てる』 岩波書店
- ・小川正人 2010年 『教育改革のゆくえ一国から地方へ』 筑摩書房
- ・刈谷剛彦、安藤理 2006年 『教育改革を評価する』 岩波書店
- ・刈谷剛彦 山口二郎 2008年 『格差社会と教育改革』 岩波書店
- ・益川敏英 小森陽一 2009年 『教育を子供たちのために』 岩波書店

[参考 URL]

- ・文部科学省 <http://www.mext.go.jp/>
- ・ベネッセ教育情報サイト <http://benesse.jp/>
- ・AllAbout <http://allabout.co.jp/>
- ・Asahi.com <http://www.asahi.com/>
- ・ガジェット通信 <http://getnews.jp/>
- ・学びの場.com <http://www.manabinoba.com/>
- ・第3回学習指導要領基本調査  
<http://www.crn.or.jp/LIBRARY/SHIDOU/PDF/S1310059.pdf>
- ・最近の日本の教育事情 <http://www.aba.ne.jp/~sugita/58j.htm>
- ・三重大学教育学部附属教育実践総合センター <http://cerp.edu.mie-u.ac.jp/>